

た。

特 性 概 要

1. 「改良青手無」は晩熟種であるが、「札幌青手無1号」に比べて開花は1～2日、成熟期は3～4日早い。
2. 草丈は「札幌青手無1号」と同程度で半蔓性種である。分枝数はやや少ない。葉は「札幌青手無1号」より白粉多くやや淡緑色を呈する。着莢は極めて多い。
3. 子実は大粒であるが「札幌青手無1号」より僅かに小さく、種皮の色はやや淡緑色である。収穫当時の雨湿による種皮の変色腐敗粒の発生が比較的少ない。
4. 子実収量は極めて多く、密播、多肥、晩播等の栽培条件の場合には特に「札幌青手無1号」をはるかに凌駕する。

奨 励 範 囲

この品種は熟期が早く極めて多収で、不良条件の下でも比較的減収が少ない上、変質粒、腐敗粒の発生も概して少ないので、従来の青豌豆栽培地帯において、この品種におきかえて奨励したい。

試験場名	開花始 月日	成熟期 月日	生育 日数	成熟期における			ha当り収量		子 実		試験年次
				草丈 cm	枝梗数 本	莢数 ヶ	子実重 kg	稿稈重 kg	1立重 g	千粒重 g	
十勝支場	6.25	8.10	110	116.6	3.9	30	1,927	2,960	723	336	昭和 年
北見支場	6.27	8.10	81	88.0	4.0	51	1,493	1,990	678	280	30～32

X 馬 鈴 薯

(1) チ ト セ (馬鈴薯農林4号)

来歴ならびに育成経過

この品種は昭和20年北海道農業試験場島松馬鈴薯試験地において「男爵薯」を母とし、「本育 393号」を父として交配されたものの中の1系統であつて、旧系統名を「北海3号」とし、昭和26年より各地で地方適否試験を行なつた結果、その優秀性を認められ、昭和28年3月優良品種に決定した。

特 性 概 要

1. 萌芽が早く初期生育が旺盛であつて、薯の着生や肥大も早いので、早掘用の品種として利用価値が高い。
2. 開花することはまれである。葉はやや小形で、その色は淡く、滑かで柔軟である。叢性は開で、茎の色は「男爵薯」よりやや濃い。
3. 薯は表皮淡黄色、球形である。目は深い。匍枝が長く薯つきはやや疎である。
4. 薯なりが多く大粒は少ないが中粒多く、薯数型に属し、収量は「男爵薯」より多い。
5. 澱粉価は「男爵薯」より0.5%ぐらい高い。
6. 食味は「男爵薯」と大差ないが、やや劣ることがある。
7. 馬鈴薯疫病および夏疫病には弱い。輪腐病、軟腐病にも弱い。バイラスには比較的強く、特にエソモザイクや一般モザイク病には犯されにくい。またXバイラスにもやや強いが、葉捲病には弱い。
8. 2次生長をおこしやすい。

奨 励 範 囲

比較的温暖な気候に適するが、その適応する地域は広範囲にわたり、「男爵薯」栽培地域全般に適応しうる。

試験場名	開花始	茎葉生育 枯涸期	生育 最盛期 日数	ha 当 り 収 量					澱粉 取得量	澱粉 価	試験 年次	
				草丈	茎数	大	中	小				計
	月日	月日	日	cm	本	kg	kg	kg	kg	kg	%	昭和年
波 島 支 場	7. 1	8. 22	118	54.7	4.7	10,990	15,180	6,320	32,490	4,380	13.4	25~30
十 勝 支 場	7.13	8.14	96	53.6	6.0	2,418	10,926	8,730	22,074	2,913	14.2	26~31
北 見 支 場	7.17	8.29	111	54.7	4.3	5,050	14,100	7,240	26,390	3,831	14.4	27~31
天 北 支 場	7.14	8.27	115	41.4	4.3	—	—	—	25,778	3,173	14.1	29~33
国立農試 美瑛研究室	7.10	8.21	108	44.6	4.0	331	4,238	11,081	15,650	2,006	12.7	29~30
国立農試 島松研究室	7. 8	8.17	—	45.0	3.8	7,273	8,889	3,637	19,799	2,772	15.0	24~27

* 開花期

(2) オオジロ (馬鈴薯農林5号)

来歴ならびに育成経過

この品種は昭和21年、北海道農業試験場島松馬鈴薯試験地において「男爵薯」を母とし「馬鈴薯農林1号」を父として交配されたものの中より選抜された1系統であつて、旧系統名を「北海9号」とし、昭和27年より各地で地方適否試験を行なつた結果、昭和29年2月優良品種に決定され、「オオジロ」と命名した。

特 性 概 要

1. 「男爵薯」より2, 3日おそい早生種で、萌芽が早く初期生育も比較的早い。薯の着生や肥大が早いので早掘用としても利用される。
2. 花は濃紫色を呈しその数は多い。花梗が抽出する。
3. 薯は表皮淡黄白で扁円形を呈し、「馬鈴薯農林1号」に似ている。収穫時の皮色はむしろ純白にちかい。目は少なく、比較的浅い。
4. 薯着は極めて密で大粒が多く粒ぞろいがよいのみならず男爵薯が少ない。薯重型に属し、収量は「男爵薯」より1割内外多い。
5. 澱粉価は「チトセ」, 「男爵薯」より高い。
6. 食味はやや淡白であるが嫌味がなく良好である。煮沸後の肉色は純白に近い。
7. 馬鈴薯疫病には弱いが, 「男爵薯」や「チトセ」よりもその被害のうけ方がおそい。Xウイルスやエソモザイク病におかされやすい。青枯病にも弱い。
8. 2次生長は少ない。

奨 励 範 囲

「男爵薯」に似てその適応範囲は広く、道内一円に適する。

試験場名	開花始	茎葉 枯凋期	生育 日数	生 育 最盛期		ha 当 り 収 量						澱粉 収得量	澱粉 価	試験 年次
				草丈 cm	茎数 本	大 kg	中 kg	小 kg	計 kg	澱粉 %				
渡島支場	月日 6.29	月日 8.21	日 118	cm 51.0	本 4.1	kg 9,183	kg 15,710	kg 5,938	kg 30,976	kg 4,820	% 15.6	昭和 28~33		
十勝支場	7. 9	8.17	98	50.0	5.0	5,343	12,625	7,932	25,900	3,652	15.1	27~33		

試験場名	開花始	茎葉生育		生育最盛期		ha 当り 収 量					澱粉 収得量	澱粉 価	試験 年次
		枯凋期	日数	草丈	茎数	大	中	小	計				
北見支場	月日 7. 9	月日 9. 5	日 118	cm 54.9	本 4.4	kg 5,580	kg 11,940	kg 6,220	kg 25,140	kg 3,949	% 18.2	昭和年 27~33	
根室支場	7.24	9. 5	—	42.0	4.1	1,687	10,041	6,481	18,209	2,942	16.1	29~33	
宗谷支場	7.19	8.25	110	32.4	4.1	1,086	9,012	8,097	18,395	2,430	14.1	30~33	
天北支場	7. 9	8.28	117	47.9	3.6	—	—	—	23,914	3,366	15.1	29~33	
国立農試 美唄研究室	7. 2	8.18	105	45.0	5.0	718	8,613	10,035	19,366	2,910	14.9	28~32	
国立農試 島松研究室	7. 6	8.22	—	40.0	4.3	6,040	10,351	4,529	20,920	3,075	15.7	29~33	

* 開花期

(3) 根 室 紅 (島系 187号)

来歴ならびに育成経過

この品種は北海道農業試験場島松馬鈴薯試験地において、「本育 393号」を母とし、「バルナシア」を父として人工交配を行ない、育成された系統を北海道立農業試験場根室支場で昭和21年に種薯の分譲をうけ、「島系 187号」の系統名で生産力検定試験行なうとともに地方適応性を検定したところ、多収、澱粉含有率も高いので昭和28年2月優良品種に決定した。

特 性 概 要

1. 草丈は高く茎数は少ない。草勢は強い。
2. 茎葉枯凋期は「紅丸」よりややおそいが、一般品種としては中位である。
3. 薯は扁楕円形で、色は赤く目は浅い。食味は良好である。
4. 薯の収量は「馬鈴薯農林1号」より劣るが「紅丸」より多く、澱粉含有率はやや高い。
5. 馬鈴薯疫病には「紅丸」と同程度で、「馬鈴薯農林1号」よりやや弱い。湿腐病には強い。2次生長をしやすい欠点がある。

奨 励 範 囲

食用兼澱粉用として「紅丸」に代わり根釧の内陸地方に栽培するのに適する。

試験場名	開花始	茎葉生育		生育最盛期		ha 当り 収 量					澱粉 収得量	澱粉 価	試験 年次
		枯凋期	日数	草丈	茎数	大	中	小	計				
	月日	月日	日	cm	本	kg	kg	kg	kg	kg	%		
十勝支場	7.12	9. 3	113	53.5	5.0	3,598	15,475	10,088	29,161	4,053	14.9	昭和26~32	
北見支場	7.12	9.17	135	69.4	4.3	4,290	18,100	7,480	29,870	4,434	14.8	27~33	
根室支場	7.20	9.13	—	64.1	4.7	—	—	—	20,634	3,232	14.7	21~26	
天北支場	7.11	9. 8	127	66.9	3.9	—	—	—	30,606	4,343	15.1	27~33	
宗谷支場	7.20	9. 7	125	49.1	3.8	403	11,514	12,539	24,455	3,049	13.3	30~32	
国立農試 島松研究室	7. 8	9.21	—	56.0	3.3	4,648	14,345	6,096	25,089	3,638	15.5	22~24 31	

* 開花期

(4) ケネベック (馬鈴薯導入1号)

来歴ならびに育成経過

この品種は昭和15年以来メリーランドで、「B 127」を母とし、「96~56」を父として交配育成した野生種の血液をつぐ種間雑種で、当初は「B70—5」の系統名で持ちこまれたが、昭和23年北米において「ケンネベック」と命名された。北海道では昭和23年農林省札幌農事改良実験所島松試験地で試作が開始された。北海道立農業試験場根室支場においては昭和26年、同天北支場では同27年に島松試験地から種薯の配付をうけ、同年以降地方適応性検定試験を行ない、昭和29年2月優良品種に決定した。

特 性 概 要

1. 開花期、茎葉枯凋期は「紅丸」「馬鈴薯農林1号」に比べて1週間内外おそく、晩熟種に属する。
2. 草丈は「紅丸」と「馬鈴薯農林1号」の中間で、茎は緑色で太く、叢性はやや開き、小葉は大きく草勢は強、花色は白で花数は少ない。
3. 薯は淡黄色で扁長卵形、目は浅くその数は中位である。薯の着生はやや疎であるが、大薯の割合がきわめて多く、粒ぞろいもよい。
4. 薯の収量は多く、馬鈴薯疫病に対する抵抗性は極めて強いが、葉捲病に罹病しやすい傾向がある。

奨 励 範 囲

馬鈴薯疫病多発地帯の根釧、天北地帯の安全確収品種として奨励する。

試験場名	開花始	茎葉生育		生育最盛期		ha 当り 収 量					澱粉 収得量	澱粉 価	試験 年次
		枯凋期	日数	草丈	茎数	大	中	小	計				
渡島支場	7. 8	9.11	139	69.1	3.5	26,290	12,140	5,830	44,260	6,035	13.6	昭和28~29	
十勝支場	7.16	9. 6	120	57.8	5.0	16,244	13,325	3,847	33,416	4,545	14.6	27~32	
北見支場	7.19	9.18	131	61.7	3.2	12,880	14,320	3,330	30,760	4,204	13.6	29~32	
根室支場	7.29	10. 1	—	70.0	4.6	10,565	13,934	4,749	29,248	4,667	16.3	27~32	
宗谷支場	7.24	9.18	135	44.3	2.5	9,962	10,601	2,506	23,068	2,883	13.5	30~32	
天北支場	7.20	9.17	136	58.6	3.4	—	—	—	32,556	4,223	14.3	27~33	
国立農試 美瑛研究室	7.13	9.14	133	49.4	4.0	4,603	11,663	6,376	22,642	3,202	14.1	29~32	
国立農試 島松研究室	7.17	9.18	—	62.0	2.7	14,929	6,015	1,114	22,058	2,823	13.8	29~32	

* 開花期

(5) ヨウラク (馬鈴薯農林8号)

来歴ならびに育成経過

この品種は昭和23年に農林省札幌農事改良実験所品松馬鈴薯試験地において「41089—8」を母とし、「馬鈴薯農林1号」を父として交配され、実生養成以降選抜も加えられてきたものである。この母親である「41089—8」は次に示すとおり野生種 *Solanum dimissum* に栽培種を戻し交配した種間雑種である。

$$41089-8 \leftarrow \begin{cases} \text{母} & 40133 \\ \text{父} & S38248-12 \end{cases} \leftarrow \begin{cases} \text{母} & S. dimissum \\ \text{父} & 3702-125 \end{cases}$$

(シンパルスアルマの自殖系統)

昭和31年より「北海17号」の系統名の下に各地で試験を行ない、昭和33年3月優良品種に決定した。

特 性 概 要

1. 極晩生種で「男爵薯」より40~50日、「馬鈴薯農林1号」や「紅丸」よりも20~40日余もおそく、ところによつては降霜の候まで青いことがある。
2. 澱粉含量は「馬鈴薯農林1号」より3~4%高く、歩留りのよい豊産性澱粉原料用種として好適している。
3. 薯は球形で大きく、表皮赤く目の部分が淡色である。この色は曝光によ

つて漸次紫色に变じ、ついには紫褐色になつてしまうが、この変色は一般種間雑種の若い世代のもの傾向である。目は深くその数は比較的多い。薯の数多く、中大粒が多い。薯着は比較的疎である。

4. 生態はよくまとまり、茎太く数少なく、分枝が多いが、茎は徒長せず倒伏に比較的強い。
5. 葉は小さく葉面が皺状を呈し、葉数多く密生する。花は小さく淡紫色であり、裏面の方が濃い。開花期間が長く花数も多い。
6. 疫病には強いが最近この品種を犯す新しい疫病が発生し始めたので、防除にあたつては充分注意せねばならない。

奨励範囲

この品種はおそくまで葉が青く、収穫適期の判定が困難な場合があるので、一応道央方面で9月下旬～10月上旬、道北および道東方面では10月上旬～中旬を目途として栽培するべきである。

試験場名	開花始	茎 葉生育		生 育 最盛期		ha 当 り 収 量					澱粉 収得量	澱粉 価	試験 年次
		枯渇期	日数	草丈	茎数	大	中	小	計				
	月日	月日	日	cm	本	kg	kg	kg	kg	kg	%	昭和年	
渡 島 支 場	7. 1	9.26	149	73.5	5.7	5,850	17,120	9,375	32,345	5,775	17.9	32～33	
十 勝 支 場	7. 9	9.30	141	52.8	4.0	13,078	17,956	6,963	37,997	7,257	20.1	31～33	
北 見 支 場	7. 7	10.11	153	70.4	4.3	7,020	16,010	10,710	33,730	6,849	20.2	32～33	
根 室 支 場	7.22	10.11	—	73.0	4.9	9,919	11,975	8,543	26,437	5,286	20.5	30～33	
天 北 支 場	7. 8	10. 1	151	72.6	2.9	—	—	—	34,480	6,440	20.0	31～33	
宗 谷 支 場	7.18	10. 8	153	53.0	3.0	4,951	12,941	7,146	25,038	4,236	17.9	31～33	
国立農試 美唄研究室	7. 3	9.21	139	64.1	3.0	3,794	13,760	8,933	26,487	5,118	19.4	31～33	
国立農試 島松研究室	7. 7	10.3	—	77.0	3.7	12,940	11,254	3,373	27,571	4,852	18.6	30～33	

* 開花期

(6) ニ セ コ (馬鈴薯農林9号)

来歴ならびに育成経過

この品種は昭和23年旧農林省札幌農事改良実験所島松試験地において、「馬鈴薯農林1号」を母とし、「ミラビリス」を父として人工交配し、昭和25年

に実生養成されたものである。その後選抜を加え、昭和30年に「島系 269 号」となり、昭和31年には「北海15号」となつて、広くその適応性を検定した結果優良なことが認められたので、昭和34年1月優良品種に決定した。

特 性 概 要

1. 熟期は「男爵薯」より約1ヶ月、「紅丸」、「馬鈴薯農林1号」より4、5日おそい晩生種で、道東、道北地方ではさらにおくれる傾向がある。
2. 草丈はやや低く、徒長することはない。茎は太くなく茎数も多くない。茎に極淡い赤色の部分的着色がある。小葉は小さく葉面粗で、葉色は比較的濃い。
3. 花は小さく、色は極淡紫で白地にちかく、先白である。花数は少ない。
4. 薯は長卵形にちかく基部が細く彎曲することがある。中大粒で表皮は滑、鮮紅色で目の部分は濃赤紫色を帯びている。目は浅く少ない。肉色は白である。
5. 食味は良好で粉質である。
6. 「紅丸」、「馬鈴薯農林1号」に比べて1割内外増収する。
7. 澱粉含有率は「紅丸」や「馬鈴薯農林1号」などよりやや高い。
8. XおよびYバイラスには弱く、モザイックと、エソモザイック病の発生が多い。湿腐病にも弱い、黒痣病や腐爛病にはやや強い傾向がある。

奨 励 範 囲

北海道内の澱粉原料用晩生種として奨励し、中晩生の「紅丸」や「馬鈴薯農林1号」と、極晩生の「ヨウラク」との中間品種に利用する。後志、宗谷管内およびこれに類似する天北および上川、網走、十勝地方の一部などに奨励する。

試験場名	開花始	茎葉生育		生育最盛期		ha 当 り 収 量					澱粉価	試験年次
		枯凋期	日数	草丈	茎数	大	中	小	計	澱粉収得量		
	月日	月日	日	cm	本	kg	kg	kg	kg	kg	%	昭和年
渡島支場	7. 5	9. 9	132	61.4	4.6	5,210	18,370	9,270	32,850	5,150	15.7	30~33
十勝支場	7.15	9.12	124	55.7	5.0	4,813	17,169	11,272	33,254	4,888	15.7	30~33
北見支場	7.16	9.30	140	49.3	4.7	8,160	18,120	7,280	33,560	5,768	17.2	31~33

試験場名	開花始	茎葉 枯凋期	生育 日数	生育 最盛期		ha 当り 収 量					澱粉 粉 収得量	澱粉 価	試験 年次
				草丈 cm	茎数 本	大	中	小	計	澱粉 kg			
根室支場	月日 7.30	月日 9.20	日 —	59.0	5.6	3,607	10,575	8,600	22,782	3,745	18.0	%	昭和年 30~33
天北支場	7.16	9.16	136	55.5	3.9	—	—	—	33,086	5,140	16.8	%	31~33
宗谷支場	7.21	9.15	131	41.4	4.1	2,197	12,449	11,753	26,399	3,697	15.7	%	31~33
国立農試 島松研究室	7.12*	9.20	—	53.0	3.8	9,160	13,879	4,441	17,480	4,204	16.3	%	29~33

* 開花期

(7) リ シ リ (馬鈴薯農林10号)

来歴ならびに育成経過

この品種は昭和23年に旧農林省札幌農事改良実験所島松試験地において、「41089—8」を母とし、「馬鈴薯農林1号」を父として人工交配を行ない育成したもので、昭和31年から「北海20号」の系統名で各試験機関において生産力検定を行なうとともに、地方適否を検定したもので、昭和35年1月優良品種に決定した。

特 性 概 要

1. 開張型に繁茂し、草丈は「ヨウラク」に比べてやや長く、茎数は同程度で、肥沃地では倒伏することもある。
2. 薯は球形で目が深く、表皮色は白であるが部分的に淡紫で芽数は少ない。
3. 着薯は疎でやや深く地中にのびる性質を有する。着薯数は「馬鈴薯農林1号」、「ヨウラク」に比べて少ないが、中、大粒が多くことに肩薯や腐敗薯が極めて少なく、粒揃いはよい。
4. 熟期は極晩生型であるが、秋季湿润な気象状態でも腐敗薯は少なく、湿害に対しても強い。
5. 粉質で食味は良好である。
6. 澱粉含有率は「ヨウラク」よりはやや低いが「馬鈴薯農林1号」に比べて3%位高く、薯収量が多いので、澱粉収得量はややまざる。
7. 馬鈴薯疫病には「馬鈴薯農林1号」や「ヨウラク」より強く、萎縮病は

「ヨウラク」より少ない。

奨励範囲

以上の特性からみて、中晩生種の「馬鈴薯農林1号」、「ニセコ」、「紅丸」と適宜組合せて栽培し、超晩生種として利用する。

試験場名	開花始 月日	茎葉 枯凋期 月日	生育 日数 日	生育最盛期		ha当り収量		澱粉 率 %	試験年次
				草丈 cm	茎数 本	上薯重 kg	澱粉 収得量 kg		
上川支場	—	10. 3	—	—	—	35,180	6,410	18.9	昭和 31~34
十勝支場	7. 9	10. 1	—	64.3	4	38,110	6,670	18.5	31~34
北見支場	7.11	10. 1	—	75.0	4	31,850	5,920	18.6	31~34
根室支場	—	10. 4	—	—	—	25,580	4,310	18.2	31~34
天北支場	—	9.23	—	—	—	33,400	5,740	17.7	31~34
宗谷支場	7.25	10. 9	159	60.6	4	31,490	5,440	18.3	31~34
国立農試 島松研究室	7. 8	10. 3	—	83.0	3.8	29,340	4,841	17.5	31~34
同 美唄研究室	—	—	—	—	—	28,460	5,363	19.6	31~33
同 紋別研究室	—	9.19	—	—	—	26,440	4,890	18.4	31~34

* 開花期

XI 亜 麻

(1) あおやぎ (本系53号)

来歴ならびに育成経過

この品種は昭和18年本場において「3633—25—1—9—4」を母とし、「本系23号」を父として人工交配を行ない、昭和21年にいたるまで集団栽培をつづけ、同年以降選抜固定を図り、昭和26年に「本系53号」の系統名をつけ、その後の系統育成を行うとともに各試験機関においても生産力検定を行ない、昭和30年3月優良品種に決定した。

特 性 概 要

1. 開花および成熟期は「サギノ—1号」より1週間内外おそく、「雲龍」よりも2日ほどおくれ、最も晩熟である。
2. 草丈は高く、有効茎長も長い。花の色は淡紫色である。
3. 子実の色は灰褐色で、千粒重量は「サギノ—1号」より重く、「雲龍」より軽い。

4. 子実の粗脂肪含有率は「サギノー1号」よりやや高く、「雲龍」より低い。
5. 亜麻銹病に対する抵抗性は「雲龍」と同様に強く、亜麻立枯病に対しては従来の品種のいずれよりも強い。稚苗時の耐寒性も強い。
6. 倒伏に対しては「雲龍」より弱く、「サギノー1号」より強い。
7. 繊維の歩留りおよび品質は「サギノー1号」程度である。
8. 乾茎収量は多収である。

奨励範囲

亜麻栽培地帯であればどこでも栽培されるが、成熟期がおくれるので、収穫期に雨期の長びく地帯にはさけるべきである。

試験場名	開花始 月日	収穫期 月日	生育 日数	成熟期における			ha当り収量		子実		繊維 歩留	試験 年次
				草丈 cm	茎長 cm	30cm間 茎本	子実重 kg	乾茎重 kg	1立 重g	千粒 重g		
十勝支場	7. 6	8. 6	103	103.5	92.2	—	539	5,775	—	4.44	23.79	昭和28~33
北見支場	7. 8	8. 6	95	94.8	—	137	580	5,018	—	3.94	23.40	26~33
天北支場	7. 4	8. 4	98	86.4	—	195	744	5,432	638	4.60	—	32
国立農試 作物部	7. 9	8. 3	97	102.0	82.0	—	661	6,955	—	4.25	17.70	26~29

(2) ウ イ ー ラ

来歴ならびに育成経過

この品種は1938年「コンカレント」と「ハーキュレス」(Concurrent×Hercules)の組合せから育成され、1951年オランダの優良品種に登録されたものである。北海道には昭和29年農林省振興局を通じてオランダから輸入され、本場および十勝、北見の両支場で品種比較が行なわれ、昭和32年3月優良品種に決定した。

特 性 概 要

この品種に対してオランダにおける特性の評価は茎および子実収量高く、多窒素栽培に耐え、茎は強韌でかつ亜麻銹病の抵抗性はかなり強いとされている。北海道における特性は次のとおりである。

1. 稚苗の色は「サギノー1号」より濃く、「あおやぎ」と同程度で、花卉の色は純白で、蒴の色は青い。
2. 開花始は「サギノー1号」より2, 3日おそく、熟期もほぼ同程度に遅いが、「あおやぎ」より約4日早い。
3. 草丈は「サギノー1号」よりやや低いが低温湿潤な気象条件下で熟期の遅延する場合「サギノー1号」より草丈が高くなることもある。しかし常に「あおやぎ」より低い。穂揃いははなはだ整一である。
4. 茎収量は「サギノー1号」と同程度かまたはやや多いが、「あおやぎ」より少ない。子実収量は著しく多く年次、施肥および播種量等の条件の変化によっても子実の確収性が高い。
5. 繊維歩留および品質は「サギノー1号」「あおやぎ」と大差なく優劣は認められない。
6. 連作病土における亜麻立枯病抵抗性検定によると、本場では「サギノー1号」より強いが北見では却つて弱い。両地区とも罹病率はかなり高く、立枯病の抵抗性は低い。亜麻銹病に対しては本場、十勝とも「サギノー1号」より強いといえるが「あおやぎ」より弱い。
7. 耐倒伏性は従来 of いずれの品種よりも強く、かつ倒伏の回復が早い。
8. 子実千粒重量は従来 of いずれの品種より重く、「サギノー1号」より約20~30%重い。

奨励範囲

従来の亜麻栽培地帯であればその適地を選ばないが、特に収穫当時の多雨地帯にはこの品種を栽培するべきである。

試験場名	開花始 月日	収穫期 月日	生育 日数	成熟期における			ha当り収量		子実		繊維 歩留	試験 年次
				草丈 cm	茎長 cm	30cm間 茎数	子実重 kg	乾茎重 kg	1立 kg	千粒 g		
十勝支場	6.30	7.28	92	85.7	75.5	—	743	4,921	—	4.92	25.75	昭和30~33
北見支場	7.7	8.1	89	83.3	—	168	664	4,473	—	4.20	22.80	30~33
天北支場	7.4	8.4	97	73.8	—	187	874	4,654	667	5.50	—	32
国立農試 作物部	7.1	7.31	92	79.3	—	—	840	4,931	—	4.63	18.66	29~31

(3) ノープレス

来歴ならびに育成経過

この品種は1937年「コンカレント」と「ハーカレス」(Concurrent×Hercules)の組合せから育成され、1954年にオランダの優良品種に登録されたものである。北海道には「ウイーラ」と同じく昭和29年農林省振興局を通じてオランダから輸入され、本場、十勝および北見の両支場で品種比較が行なわれ、昭和33年3月優良品種に決定した。

特 性 概 要

この品種に対してオランダにおける特性の評価は、銹病の抵抗性強く、耐倒伏性は中位で、繊維歩留は非常に高く、繊維品質は良好であるとしている。北海道における特性は次のとおりである。

1. 稚苗の色は「ウイーラ」と同じ濃緑で、花色は淡藍で「サギノー1号」「あおやぎ」と同色である。
2. 開花始および熟期は「ウイーラ」より3日遅いが、「あおやぎ」より2～4日早い。
3. 草丈は「ウイーラ」より高く、「サギノー1号」とほぼ等しいが、「あおやぎ」より低い。
4. 茎収量は本場で「ウイーラ」より多収で「あおやぎ」に伯仲し、十勝、北見で「ウイーラ」とほぼ等しい。
5. 子実収量は「ウイーラ」より少なく、「あおやぎ」と同様年次差が大きく、確収性に乏しい。
6. 繊維歩留は従来の品種中最も高く、繊維品質は従来の品種と優劣はない。
7. 連作病土における亜麻立枯抵抗性検定によると、「ウイーラ」より強いが、「あおやぎ」よりはるかに弱く、銹病に対しては「ウイーラ」と大差なく、「あおやぎ」より著しく弱い。
8. 収穫期近くの耐倒伏性は「ウイーラ」より劣るが「あおやぎ」と同程度かまたはやや強い。

9. 子実千粒重量は「ウィーラ」より僅かに軽いが「あおやぎ」より約10%ほど重い。

奨 励 範 囲

倒伏性は「サギノー1号」等の従来の品種より強いが、「ウィーラ」より弱く、倒伏の多発する道東沿海地域およびこれに準ずる地域はさけた方がよい。

試験場名	開花始 月日	収穫期 月日	生育 日数	成熟期における			ha当り収量		子 実		繊維 歩留	試験 年次
				草丈 cm	葉長 cm	30cm間 茎 数	子実重 kg	乾茎重 kg	1立 重 g	千粒 重 g		
十勝支場	7. 2	8. 1	97	90.1	79.6	—	646	5,178	—	4.84	27.88	昭和30
天北支場	7. 6	8. 3	97	83.4	—	163	797	5,124	659	5.00	—	32
国立農試 作物部	7. 3	8. 2	95	81.2	71.5	—	842	5,057	—	4.52	19.73	29~32

XII て ん 菜

(1) 導 入 2 号 (GW 359)

来歴ならびに育成経過

この品種はアメリカ、コロラド州のグレイト、ウエスタン製糖会社で、野生種「ベタ、マルテマ」の2年生の1変種を材料とした交配によつて育成せられた品種「GW 359」で、昭和26年に日本甜菜製糖株式会社がはじめて輸入し、その後引つづき会社が大量の種子を輸入して試験機関ならびに農家の試作を行ない、毎年優秀な結果を示したので、昭和29年2月優良品種に決定した。

特 性 概 要

1. 草丈は一般に高く、葉色は本育系のものに比べて濃緑で葉数も多い。
2. 甜菜褐斑病の被害が極めて少ない。
3. 葉頸重量が多く、根との比率が同程度である。
4. 根形は一般に長く、かつ分岐根がやや多い。
5. 葉根収量は多いが糖分はやや低い。登熟期は「本育 192号」に比べてややおくれる。

6. 有害性窒素は本育系のものに比べて少ない。

奨励範囲

登熟期は本育系のものに比べて遅れるので、道東、道北地方の寒冷地帯や中央部でも高冷地等を除いては道内一円に栽培してよい。

試験場名	収穫期における				ha 当り 収 量			根中糖分	純糖率	試験年次
	草丈	生葉数	枯葉数	根周	菜根重	葉頭重	可製糖量			
	cm	枚	枚	cm	kg	kg	kg	%	%	昭和年
道立農試種芸部	49.8	26	13	26.9	34,335	32,270	5,432	17.36	92.17	31~33
渡島支場	51.3	26	—	24.9	43,450	—	6,850	17.25	91.56	29~33
十勝支場	52.3	24	10	25.8	33,854	31,869	5,514	16.93	93.19	28~33
北見支場	47.3	25	—	24.2	33,799	24,690	5,553	18.34	91.06	29~33
根室支場	52.1	22	—	21.3	19,317	34,211	3,094	17.56	90.89	29~33
天北支場	50.2	23	—	25.0	32,162	26,434	4,963	16.72	90.77	29~33
宗谷支場	42.9	22	—	20.1	18,540	21,215	3,242	19.08	91.53	29~33
国立農試作物部	57.0	26	—	—	35,390	36,650	5,180	16.07	90.57	28~34

(2) てん菜合成1号(SY-B)

来歴ならびに育成経過

北海道農業試験場作物部において、昭和17年以降本育系の優良品種の中より優良個体を選抜し、2~4世代にわたって自花授精を行ない、毎代特性のすぐれた系統を選抜した。昭和26年までトップクロスにより、一般組合わせ能力を検定し、優良な系統についてはさらに二面交雑を行なつて、一般および特定組合わせ能力を検定し、これらの結果にもとづき Doxtator の合成品種推定式によつて系統群を選抜し、昭和31年度は集団で交配採種した。

Doxtator の推定式

$$A = b - \frac{1}{n}(b - c)$$

b = 全単交配の平均

c = 親の収量

n = 組合わされた系統数

以上によつて選抜されたものを2ヶ年にわたり本道各場所において生産力を検定した結果すぐれた特性を示したので、昭和35年1月優良品種に決定した。

特 性 概 要

葉根重は根室支場では年次による変動はあるが、他の支場ではいずれも「本育 192号」よりまさっていた。根中糖分は最も高く、「本育 192号」に比べてわずかに高い。褐斑病抵抗性は「本育 192号」に比べやや強い。

奨 励 範 囲

根釧地方を除く従来の「本育 192号」の栽培地帯に奨励する。

試 験 場 名	収 穫 期			kg当り収量		根中糖分	試験年次
	草 丈	葉 数	根 周	葉根重	可製糖量		
	cm	枚	cm	kg	kg	%	昭和 年
道立農試種芸部	50.4	24.8	26.1	28,880	4,100	15.88	34
上 川 支 場	56.6	23.7	31.2	41,975	6,845	17.93	33~34
十 勝 支 場	56.5	27.0	28.7	40,475	6,540	17.14	33~34
北 見 支 場	44.5	24.5	25.9	27,220	4,465	17.78	33~34
根 室 支 場	56.2	24.1	25.9	26,565	4,270	17.89	33~34
天 北 支 場	53.5	—	28.8	34,195	5,550	17.78	33~34
宗 谷 支 場	51.7	22.3	24.3	28,505	3,870	18.88	33~34
国立農試作物部	—	—	—	41,435	6,375	17.11	33~34

備考 病害無防除区の成績である。

(3) てん菜合成2号 (SY—C)

来歴ならびに育成経過

北海道農業試験場作物部において昭和28年に「GW 359」より任意に50個体の母根を選抜し、昭和29年これを2つ割りにして、一方を自家授精、他の一方を集団定植、自由交雑を行なつて母根別に採種した。昭和30年自殖1回系統 (S₁) および母系々統の特性を検定し、その結果をもとにしてさらに優良な S₁ 系統を選抜し、これら S₁ 系統から系統群を選抜し、昭和31年度に集団で交配採種した。

以上によつて育成されたものを2ケ年にわたり本道各試験機関において生産力を検定した結果、すぐれた特性を示したので昭和35年1月優良品種に決定した。

特 性 概 要

葉根重は北見支場においてやや変動が認められ、根室支場においてやや劣るが、全般的には「導入2号」にまさる。根中糖分は「導入2号」と大差ない。褐斑病抵抗性は「導入2号」に比べわずかに弱い。

奨 励 範 囲

従来の「導入2号」の栽培地帯で、これにおきかえて奨励する。

試 験 場 所	収 穫 期			ha 当り 収 量		根中糖分	試験年次
	草 丈	葉 数	根 周	葉根重	可製糖量		
	cm	枚	cm	kg	kg	%	昭和 年
道立農試植芸部	48.6	31.6	30.3	38,930	5,540	15.97	34
上 川 支 場	54.9	24.9	31.6	51,730	8,270	17.46	34
十 勝 支 場	55.6	24.5	28.6	42,765	6,765	16.65	33~34
北 見 支 場	45.7	25.3	25.0	26,940	4,540	18.08	33~34
根 室 支 場	58.0	23.9	28.0	30,600	4,680	16.88	34
天 北 支 場	51.8	—	31.5	38,840	6,490	17.94	34
宗 谷 支 部	54.0	22.8	25.0	34,480	5,350	16.83	34
国立農試作物部	—	—	—	40,680	5,025	16.46	33~34

備考 病害無防除区の成績である。

XIII 薄 荷

(1) 万 葉 (薄荷農林1号)

来歴ならびに育成経過

この品種は昭和22年に旧札幌農事改良実験所北見試験地において、「南進」を母とし、「赤田」を父として人工交配を行ない、その実生種子を育成し、以来選抜を重ね、昭和26年「北交1号」という系統名をつけて生産力検定試験ならびに特性検定試験を行なうと同時に各地で地方適否を確かめたところ優良と認めたので昭和28年3月優良品種に決定した。

特 性 概 要

1. 草型は扇状をなし、葉は楕円形でやや濃緑色でたれ、葉柄は短かく、茎は赤紫色で、外見上識別しやすい。
2. 収穫適期は9月下旬で、「北進」に比べておそい。

3. 耐病性ならびに越冬性は極めて強く、銹病による被害は少ない。
4. 取卸油量は従来の品種よりもはるかに多く、脂分は「北進」よりもやや劣る。

奨励範囲

耐病性、越冬性は強く、輪作用薄荷として育成した品種で、薄荷栽培地帯全地域に栽培してよい。

試験場名	植付期	刈取期	刈取期における			ha 当り 収 量			採脂率	試験年次
			草丈	分枝数	葉数	生草	乾草	取卸油		
北見支場 国立農試 遠征研究室	月 月 5.21 9.20	日 日 9.20 9.中	cm 89.0	本 41	枚 509	kg 22,050	kg 6,075	kg 47,928	% 53.6	昭和 年 26~33
	—	9.中	105.0	45	529	31,740	8,555	73,750	60.5	27~28

(2) すずかぜ (薄荷農林2号)

来歴ならびに育成経過

この品種は旧札幌農事改良実験所北見試験地において、昭和23年「南進」を母とし「北進」を父として人工交配を行ない、その雑種第1代を養成して選抜を重ね、昭和27年より「北交2号」の系統名をつけ道内主要生産地でその実用的特性につき各種の試験を重ねてその優秀性を認めたので、昭和29年3月優良品種に決定した。

特 性 概 要

1. 草型は「万葉」の扇状型に対し、やや直立型をなし葉は楕円形でたれ、葉色はやや淡く緑色で特有の光沢があり、茎は淡赤紫色である。
2. 地下茎は太く、地中にやや垂直に伸長する傾向がある。
3. 銹病の抵抗性は「万葉」に比較するとやや弱いのが、在来品種に比べるとはるかに強く、倒伏にも強い。
4. 晩生種で、収穫期は在来品種に比較すると10日前後おそく、その適期は9月中旬で「万葉」よりも1週間位早いのが、越冬性が強く種根、萌芽ともに多く増殖率が高い。
5. 生草重は「万葉」より多いが収油率がやや低いので、取卸油量は「万

葉」に比較するとやや劣る。しかし脂分含量は「万葉」より高く、「北進」と同程度である。

奨励範囲

「万葉」と適宜配合して栽培することが安全増収上望ましいが、多肥性であるから瘠薄地帯は避けたほうがよい。

試験場名	植付期	刈取期	刈取期における			ha 当り 収 量			採脂率	試験年次
			草丈	分枝数	葉数	生草	乾草	取卸油		
北見支場 国立農試 遠軽研究室	月日 5.21	月日 9.21	cm 87.0	本 41	枚 407	kg 22,971	kg 6,691	kg 43,192	% 55.8	昭和 年 26~32
	—	9.中	110.0	45	543	34,250	9,540	68,950	64.0	27~28

XIV スエーデンかぶ

(1) ネムロルタバガ

来歴ならびに育成経過

北海道立農業試験場根室支場において、昭和21、22の両年に、根釧地方の地方種を蒐集して適品種の選抜育成を行なっていたが、そのうち根室町1農家の集団から優良系統を選抜し、昭和23年に降集団選抜ならびに生産力検定予備試験を行ない、昭和26年より生産力検定試験を行なったところ、優良と認め昭和29年3月優良品種に決定した。

特 性 概 要

1. 草丈、葉数、根周は「マゼスチック」と大差ないが、姿勢は「マゼチック」がやや直立であるのに対し、この品種は中間である。
2. 地上部の根色は赤紫色で、地中部の根色は白色であつて、肉色も白色である。
3. 白腐病に対する抵抗性は、「マゼスチック」よりはるかに強く、「せんだいかぶ」よりもやや強い。
4. 根部収量は「せんだいかぶ」よりも多収で、「マゼスチック」と比較すれば、白腐病の多発年には多収を示し、本病の少ない年には多少減収になる。